

〔論 文〕

外国にルーツを持つ子どもたちに対する参加型調査の可能性

—フォトボイスを活用した事例をもとに—

武 田 丈*¹ 原 弘 輝*²

I. はじめに

今世紀初頭における世界的な課題の一つに、国境を超えた人の「移動」の問題がある。国連の推計によると、1970年に8200万人だった世界の移民の数は2005年には2億人に増加し、世界の人口の約3%を占めるようになった。もちろん、日本も例外ではない。1970年頃までの日本への移住者の大半は、オールドセトラーと呼ばれる戦前や戦中の朝鮮半島からの移住者であり（渡戸, 2002）、その数も毎年微増程度であった。しかし、日本の経済発展に伴い、ニューカマーと呼ばれる移住者たちがさまざまな国から日本にやってきて生活するようになり、日本で生活する外国人の数は大幅に増加するようになった。ニューカマーの移住では、まず1970年代に中国からの帰国者とその家族、インドシナ難民、興行ビザのフィリピン女性などの流入が起こった。続いて1980年代の日本経済の本格的なグローバル化によって、大都市では欧米あるいはアジアからのビジネスマンが増加したが、ニューカマーの流入が本格化したのは1980年代後半のバブル期である。この時期に、アジア各地からの留学生や非正規の外国人労働者が増加した。そして、日本への外国人の流入が飛躍的に増加するようになったのが1990年代である。日系人の単純就労を認めた1990年の「出入国管理及び難民認定法」の改定によるラテンアメリカからの日系人の流入に加え、1989年の「研修」という在留資格の創設とその後の要件緩和、1990年前後からの国際結婚数の増加、1990年代後半からの留学生数の再増加などがその要因としてあげられる。ま

た人数は限定されているものの、経済連携協定に基づく外国人看護師・介護福祉士の受け入れが、2008年にインドネシアとの間で、2009年にはフィリピンとの間で始まった。このように、日本で生活する外国籍の住民（外国人登録者）の数は、過去3年間はリーマンショックなどによる世界的な不景気によりやや減少したが、2011年末の時点で213万4,151人となっており、その数は10年前に比べると約1.3倍で、長期的には増加傾向にある（法務省, 2011）。

こうした外国人登録者の増加に伴い、日本で生活する外国にルーツを持つ子どもたちも増加している。2011年の15歳未満の外国人登録者数は182,988人であり（法務省, 2012）、父母のいずれかが外国人の出生児数は集計が始まった1987年の17,596人から2008年の38,032人へ増加し、2008年の日本の出生数の3.4%を占めるようになっている（山内, 2010）。また、文部科学省（2012）の「学校基本調査」によると、2010年5月1日時点で日本全国の公立の小学校、中学校、高等学校、中等教育学校及び特別支援学校に在籍する外国人児童生徒数は74,214人であり、そのうち日本語指導が必要な生徒が28,511人もいとされている。この日本語指導が必要な生徒数は、2001年と比較すると1.5倍以上に増加している。こうした状況から、外国にルーツを持つ児童の日本社会における適応に関する関心が高まるとともに（アジア・太平洋人権情報センター, 2011；移住者と連帯する全国ネットワーク, 2012）、こうしたテーマに関する調査が近年増加している（例：本間, 1996；岩木・井上, 2101；金, 1996；上野, 2003）。

キーワード：子ども、参加型調査、外国人

* 1 関西学院大学人間福祉学部教授

* 2 関西学院大学大学院人間福祉研究科博士課程前期課程

しかし、成人を対象とした調査とは異なり、子どもを調査対象として調査データを収集するには特別な配慮や工夫が必要である。特に、言語や文化の違いをもつ外国にルーツを持つ子どもを対象に調査する際には、こうした努力は不可欠である。そこで、本論文では、こうした子どもたちに対する調査の必要性が高まってきている背景を簡単に説明したうえで、子どもに対する調査において注意しなければいけない点や子どもに有効な調査手法について考察する。そして、われわれが実際に外国にルーツを持つ子どもたちを実施した参加型調査の事例を基に、こうした子どもたちに対して視覚的手法を用いた参加型調査を実施する有効性と限界について議論する。

II. 外国にルーツを持つ人たちが直面する課題

外国にルーツを持つ子どもたちに対する調査方法について議論する前に、この節ではこうした子どもたちに対する調査の必要性が日本で高まってきている背景である、彼（女）が日本社会の中で直面する課題を見ていく。

1) 外国にルーツを持つ人たちが直面する課題

日本に移住してきた外国人の多くは、日本社会で直面する「言葉の壁」、「制度の壁」、「心の壁」などが原因で、日本社会の中でさまざまな課題に直面する（田村, 2000）。まず家庭内の問題としては、日本人男性との国際結婚が多いフィリピンや中国からの女性たちの中には、DVなどの夫婦間トラブルや離婚に関する問題に直面している人が少なくない（花崎, 2003；林田・片岡, 2008；カラカサン, 2006）。また、子育て中の外国人の母親は、日本人の母親と比較して、出産・育児に対する不安、育児法の違い、家族間の葛藤などにより、精神的健康度が低いという報告もある（今村・高橋, 2004）。さらに住居に関する問題として、入居拒否、不当な賃貸契約、住環境の水準の低さなども指摘されている（小菅, 1996）。

家庭外の課題としては、医療機関に関する情報不足、機関利用におけるコミュニケーション問題、医療システムや価値観の相違による問題、さらには健康保険未加入者に対する緊急医療問題な

どがある（井野, 1996；田嶋, 1995）。一方、労働に関しては、雇用主による外国人労働者の健康保険未加入、正当な賃金の不支払い、労災への未加入・不適用、危険な労働への従事、不当解雇といった差別がある。さらに、社会保障・医療に関しては、先ほどの健康保険未加入の問題に加え、生活保護や年金の受給資格などに関する問題が指摘されている（鄭, 2009；金, 2007；永井, 2005；大窪, 2001；朴, 2002）。

2) 外国にルーツを持つ子どもが直面する課題

先述した外国にルーツを持つ人たちが直面する課題は当然その子どもたちにも影響を与えているのだが、外国にルーツを持つ子どもたちは子ども固有の課題にも直面している。それは、保育園や小中学校におけるコミュニケーションの問題や生活習慣・文化の相違に伴う問題にはじまり、日本語能力や母語の維持、無国籍の問題、アイデンティティ形成、就学・進学の問題、学齢超過、さらには不就学やそれから派生する非行問題など、その内容も幅広い（網野, 2001；大場・民秋・中田・久富, 1998；移住者と連帯する全国ネットワーク, 2012；坂井, 1995；都築, 2001）。

家庭における子どもの課題としては、ニューカマーの多くの外国人の親が生活を安定させることに精一杯であり、生活習慣、文化、価値観、言語、カリキュラム内容が異なる日本社会で教育を受ける子どもへのケアが十分にできないという現状がある（岩木・井上, 2010）。また、日本で幼少期から育った子どもの場合には、日本を母国として内面化しつつ、もともとの母国のアイデンティティを維持するという葛藤を抱えるケースも多い。

学校における課題としては、日本の通常学校では外国にルーツを持つ生徒へのサポートが不十分な場合が多く、子どもが学校にうまく適応できないというケースが少なくない。これは、先述の親に生活の余裕がないということ、また学校と保護者とのコミュニケーションギャップということも深く関連している。こうした状況もあり、ブラジル人学校のような母語で母国のカリキュラムに沿って教育する学校に通うケースもあるが、高額な学費の問題に加え、学校と家庭では母国の文化、それ以外は日本社会という深刻な文化的ギャップ

を引き起こしているという指摘もある（岩木・井上, 2010）。

Ⅲ. 外国にルーツを持つ子どもたちに関する調査方法

日本社会で生活する外国にルーツを持つ子どもたちの増加に伴い、こうした子どもたちが直面するさまざまな課題に焦点を当てた調査研究も近年増加しており、その調査手法もさまざまである。ここでは、こうした日本における外国にルーツを持つ子どもたちが抱える課題に焦点をあてた調査に関して、データ収集のソース別にどのような調査手法が用いられた先行研究があるのかを整理する。

1) 2次データにもとづく調査

外国にルーツを持つ子どもたちの直面する課題を明らかにする調査研究の中には、既存の調査や関連機関の所有するデータをもとにしたものがある。たとえば、鍛冶（2012）の調査報告では、2005年の国勢調査のデータをもとに、日本における外国にルーツを持つ子どもたちの人口規模と家庭環境を分析し、彼（女）らの経済力や就学率の低さの課題を浮き彫りにしている。

一方、NPOや相談機関のケース記録などの質的データを活用した事例研究も多くある。たとえば、外国人相談を行っている支援機関のケースに基づき、中島（2011）は外国にルーツを持つ子どもたちが直面する在留資格や国籍にまつわる課題を指摘しているし、岩木・井上（2010）は日系ブラジル人の子どもの発達課題を明らかにし、その心理支援の在り方を示唆している。

2) 関係者からのデータにもとづく調査

保護者、先生、あるいは日本人のクラスメイトなどを対象にした調査から、外国にルーツを持つ子どもたちの直面する課題を明らかにする調査も多くある。量的調査の例としては、外国にルーツを持つ子どもやその保護者との交流や彼（女）らに対する意識について日本人の生徒やその保護者に対して実施したアンケート調査（本間, 1996；小内, 2001）や、日系ブラジル人児童の保護者を

対象に実施した子どもの教育や進路に関するアンケート調査（小野寺, 2001）などがある。

質的な調査の例としては、外国にルーツを持つ子どもの保護者およびその子どもたちが通う学校の教師に対するインタビューによって、こうした子どもたちの教育的な課題や親の願望を通して、子どもたちの「居場所」の重要性を明らかにした調査（福山, 2010）などがある。

3) 外国にルーツを持つ子どもたちからのデータにもとづく調査

言語や文化の障壁に直面する外国にルーツを持つ子どもたち自身から収集したデータにもとづく調査も多く存在する。アンケート調査を活用した例としては、小学5年生から中学2年生のブラジル人学校の生徒を対象に進路や日本人との交流の実態を明らかにした調査（小野寺, 2001）や、集住地域とそうでない地域に住む中学1、2年生の在日コリアンに対する調査から民族文化的環境や民族的アイデンティティの差異を明らかにした調査（金, 1996）などがある。

一方、参与観察を中心とするフィールドワークをもとにエスノグラフィーなどの質的な手法を用いて外国にルーツを持つ子どもたちの課題を調査する研究も多い。たとえば真鍋（2001, 2007）は、外国にルーツを持つ子どもたちを教える先生と、研究者というダブルロールによる参与観察を通して、こうした子どもたちの文化的アイデンティティの形成に関するエスノグラフィーを実施している。

4) 研究テーマによる調査手法の選択

ここまで見てきたように、外国にルーツを持つ子どもたちに関する調査方法にはさまざまなものがあるが、当然調査テーマによって用いられる方法が規定されてくる。人口や居住地域、社会・経済的状況などの客観的な状況の分析の際には、2次データにもとづく調査は有効であろう。一方、関係者からのデータにもとづく調査では、関係者の外国にルーツを持つ子どもたちに対する意識や、こうした人たちの目から見た外国にルーツを持つ子どもたちの課題に関して分析することはできるだろう。

しかし、外国にルーツを持つ子どもたち本人たちの視点による課題を明らかにしていくためには、やはり当事者たちからデータ収集するのが最適であろう。しかし、言語や文化の異なるこうした子どもたちを対象にした調査ではもちろん、日本人であっても子どもを対象にした調査に関しては注意が必要である。次節では、子どもに対して調査を実施する際の注意点、およびその手法について考察する。

IV. 子どもに対する調査方法と注意点

子どもを調査対象者として調査を実施する際には、上記で議論した調査テーマとともに、子どもをどのような存在であるかという認識の仕方によっても、使用される調査方法が変わってくる。一般的に、調査対象者としての子どもの認識の仕方としては、子どもを大人と同等にみなす見方と、大人とはまったく異なる調査対象グループだとみなす見方がある (Punch, 2002)。大人と変わらないという見方の場合は、大人に対する調査と同じ手法を用いて調査する。先に紹介したアンケート調査 (小野寺, 2001) のように、一定の年齢に達した子どもたちを対象とする場合には、大人を対象としたときと同じ調査手法を用いることが有効なこともある。しかし、低年齢の場合や言語能力によってアンケート調査が難しい場合も多いし、質的なインタビュー調査の場合には、研究対象者である子どもと、成人の調査者との間に年齢差や世代差による縦の力関係が存在するので、調査の中で子どもが自由に自分を表現できなくなってしまう可能性が高い (Mauthner, 1997; Punch, 2002)。

これに対して2つ目の見方は、子どもは成人の研究対象とは異なるという見方に基づくもので、こうした認識に基づく調査者は、子どもの世界や見方を理解するにはエスノグラフィーのような調査方法がもっとも適切な手法であるとみなすことが多い。しかし、エスノグラフィーでは、対象者が子どもであろうが大人であろうが、長時間にわたる繰り返しの参与観察やインタビューが必要となる。しかし、成人の調査者が完全に子どもに帰って、子どもの世界に溶け込むことは

不可能だという指摘もある (Fine & Sandstrom, 1988; Hill, 1997)。

そこで本節では、子どもに対して調査を実施する際の注意点を議論したのち、こうした議論にもとづいて適切な調査手法の可能性を議論していく。

1) 子どもに対する調査の注意点

Punch (2002) は、大人を対象とするときと比較して、子どもに対する調査が異なる点とその原因を7つに分けて整理している。

① 調査者自身の視点を強いてしまう可能性

子どもであろうが大人であろうが、質的調査における注意点は、調査者の視点を強いてしまわないこと、対象者が自由に自分の意見を表現するように促すことである。しかし、子どもに対する調査で難しいのは、調査者が子どもの世界を完全に理解することである。調査者は自分自身がかつて子どもであったこと、また日頃子どもと接することがあることから、自分が子どもを理解できると勘違いしてしまう。その結果、自分が理解していると思いついて、子どもたちの独自の視点を理解しようという視点到欠けしてしまうことがある。また、大人中心の社会の中で暮らしている子どもたちは、自分たちの視点を自由に表現することを恐れたり、そう出来たとしてもそれを大人が真剣に取り上げてくれない経験をしている。こうした状況において、子どもが自由に視点や意見を表現するためには、参加型開発の手法であるPLAや参加型アクションリサーチが有効であると指摘されている。こうした手法は、単に子どもが自由に表現できる情報収集の手法として優れているだけでなく、そのプロセスにおける社会や意思決定への参加を通してエンパワメントの効果もあるとされている (Hart, 1997; PLA Notes, 1996)。

② 信頼性と妥当性

子どもは往々にして調査の中で嘘を言ったり、現実と空想の世界が混じりあったりすることがあるという指摘がある。しかし、これは何も子どもに限ったことでなく、1) 辛いテーマに関する話を避けるため; 2) 調査者の聞きたいと思うことを話そうとするため; 3) 恐れ、恥ずかしさ、あ

るいは調査者に好印象を与えるため、という3つの理由により、研究対象者は調査の中で嘘をつく可能性がある。

また、子どもは「…だよな?」、「…でしょう?」、「…じゃない?」といったように、調査者の肯定を求める質問に対して影響されやすいことや、閉じられた質問を繰り返されると大人より内容を変更しやすい傾向にあることが指摘されている(菱川, 2011)。

こうしたことを防ぐためには、子どもと調査者の間の信頼関係の構築が重要となってくるが、子どもの場合は、大人の調査者との間の縦の力関係が強くなってしまうので、特に注意が必要である。大人がコントロールする社会で暮らす子どもは、一般的に大人を喜ばそうとしたり、大人の反応を過度に気にする傾向がある。したがって、研究対象者である子どもたちと長時間かけてしっかりと信頼関係をつくることが重要である。

③ 言語の明瞭さ

大人に対する調査でもそうだが、子どもに対する調査では特に調査ツールとして使用する言語の明瞭さはとても大切である。特に年齢の小さい子どもや外国にルーツをもつ子どもは使用できる単語数に限りがあるので、年齢や能力に応じた調査手法の選択が重要となってくる。年齢が高い子どもは大人と同様の質問票やワークシートを用いることが可能であるが、小さい子どもの場合には、お絵かきなどの芸術的な手法が有効だとされている。

④ 調査セッティング

大人と同じように、子どもにとっても調査が行われる状況も考慮する必要がある。調査セッティングは、子どもたちに主導権がない大人のスペースであることが多い。たとえば学校という場所は、子どもたちにとって慣れ親しんだ学びの場所であるが、実際には大人たちが管理している場所である。したがって、学校での調査では、子どもたちは「正しい」答えを出さなければいけないというプレッシャーを感じる可能性があることを、調査者は認識すべきである。また、インフォームド・コンセントに関しても、学校という状況下では、

「不参加」を選択することを躊躇させてしまう可能性があることを認識しておくことが大切である(Mauthner, 1997)。

一方、子どもたちの慣れ親しんだ場所での参与観察は、子どもにとってより安心できる手法であることが多い。しかし、子どもにとって慣れた環境が、必ずしも子どもにとって自由に表現できる場所であるとも限らない。なぜなら、見ず知らずの調査者の来訪によって、子どもたちは自分たちの領域を侵されていると感じるかもしれないからである。特に思春期の若者などを対象とする場合には、プライバシーの問題は特に繊細であり、家族がそばにいるかどうかで発言内容が異なる可能性があることを、調査者は心に留めておく必要がある(Mauthner, 1997)。このように、子どもに対する調査では、調査セッティングに特に繊細な配慮を払う必要がある。

⑤ 信頼関係の構築

調査対象者との信頼関係構築は、大人であろうが子どもであろうが重要であるが、調査者の多くは子どもとの信頼関係構築に慣れていない。子どもを見下さないようにすることはもちろん重要だが、普段子どもと接することのない調査者にとっては、子どもとの信頼関係構築のきっかけとなる、自分と子どもたちの間の共通点を見つけたり、子どもに受け入れられる態度や行動をとることが難しい。効果的なのは、子どもたちのルールに従って、子どものレベルに応じて行動することである。

⑥ 分析

調査の中でどのデータが使用されるべきかの選択やデータの解釈は、すべて大人である調査者が行うことが多い。子どもの語ることを、大人の世界観を通して解釈したり、分析することになってしまう可能性を、調査者は常に意識しておくことが大切である。

⑦ 適切な調査手法の使用

子どもを対象に調査を実施する場合、子供向けの手法、つまり身近なものや子どもの関心の高いものを描いてもらうなど、子どもが「楽しめる」手法を選択することが望まれる。なぜなら、1)

子どもは楽しい技法を望むし、集中力の維持が短い子供にとってはその方が有効である；2) 大人中心の社会で暮らす子どもにとっては、大人と同等に扱われる経験に乏しく、見知らぬ大人と1対1で話すことに恐れを感じる可能性がある、からである。したがって、子どもが有する特定の能力を活かせる手法や、子どもが関心を持つような方法によってデータ収集することが有効だとされている。

2) 子どもに有効な調査方法

ここまで見てきたように、子どもに対する調査の際の注意点にもとづいて考えてみると、子どもを大人と同等にみなし大人に対する調査で一般的に用いられているような量的調査、あるいはインタビューを中心とする質的な調査方法を用いることは、必ずしも適切とは言えない。また、子どもを大人と全くことなる存在として認識して用いられるエスノグラフィーなどの参与観察を中心とした方法も、常に適切な手法だとはいえないことがわかる。

こうした状況から、Jamesら (James, Jenks & Prout, 1998) は、調査における子どもの3つ目の見方として「子どもは大人と異なった能力を有している存在」とみなし、その能力に応じた調査手法を用いるべきだとしている。具体的には、絵、写真、日記、文章完成、ワークシート、さらには参加型開発で用いられているPLAやPRAなど、子どもたちが主体的に参加でき、課題や作業をこなす手法が、子どもにとって有効だとしている (Hart, 1997; Punch, 2002; 清水, 2011; White, Bushin, Carpena-Mendez & Ni Laoire, 2010)。参加型手法は、子どもたちが自分自身のやり方で表現することができる方法だからである。また、課題や作業を行ってもらうような子どもの関心を引き付ける手法を用いることで、子どもたちも大人の調査者に対して打ち解けて本音を語りだすため、インタビューを併用することも可能となる。

3) 視覚的手法を用いた外国にルーツを持つ子どもに対する調査

こうした参加型調査法の中でも、特に絵や写真を用いた視覚的な手法は言語や読み書きの能力に

制限されることがないので、外国にルーツを持つ子どもたちの経験や考えを表現することができる手法だといえるであろう。

お絵かきは、子どもにとって創造的で楽しい手法であるため、子どもたちが調査に積極的にかかわるようになる (Punch, 2002)。お絵かきは、内容を途中で変えたり、描き足したりすることが可能なので、調査者の質問に対して即答しなければいけないインタビューとは異なり、子どもたちが自分のペースや方法で自分を表現することが可能である。

一方、写真を撮ることも子どもたちにとっては楽しい活動であり、自分のペースで表現できる方法である。子どもにカメラを渡して写真を自分で撮ってもらうことによって、何を撮るか撮らないかの決定権を子どもに与え、調査プロジェクトの内容や方向性の主導を子どもの手に委ねることが可能となり、それによって子どもと調査者の間の信頼関係の構築もスムーズに行える (White et al., 2010)。たいていの子どもがすぐに写真の撮り方の基本的な技術を身につけることができるし、お絵かきよりも才能に左右されることなく、対象物を捉えることができる。また、お絵かきの場合、多くの子どもが同じ部屋で描く場合が多く、描くテーマがまわりの子どもの作品に影響されてしまうことがある。これに対して、写真の場合は各自が自宅や外で撮影することが多いため、そうした影響を受けることが少ない。

欧米では外国にルーツを持つ子どもたちを対象にした視覚的手法を用いた調査が実施され、移民の管理体制、構造的な人種差別、いじめ、ギャング、文化、孤独、ホームシックといった問題を写しだすことに成功している (Clark-Ibanez, 2004; Mand, 2012; Streng, Rhods, Ayala, Eng, Arceo & Philipps, 2004; Warwick, Neville & Smith, 2006)。たとえば、Whiteら (2010) は、アイルランド人の子どもとアイルランドに移住してきた外国にルーツを持つ子どもを対象に、写真とお絵かきを用いた参加型調査を実施している。この調査の中では、どちらのグループも家族を写すケースが多いが、外国にルーツを持つ子どもの方が直近の家族のみを写す傾向が強いということ以外、子どもたちが撮影するものにあまり大きな違いはなく、

その原因を世界規模のブランド戦略などの都市におけるグローバリゼーションの影響だと分析する一方、視覚的手法を用いた調査は母語が異なる子どもや話す能力は有していても読み書きが苦手な子どもを対象にした調査には有効な手法であると結論付けている。

V. 日本で外国にルーツを持つ子どもに実施した写真を用いた参加型調査の事例

日本でも、外国にルーツを持つ子どもたちに対する視覚的手法を用いた参加型調査が、少しずつではあるが行われるようになってきている。たとえば、日本でも、ブラジル人児童の学校適応に関する調査(小西・稲垣, 2012)の中では、自由画が活用されている。この調査の中では、ブラジル人児童が12枚中10枚に家族を描いていることから、家庭が児童にとって最も楽しい場所であること、また家族だけの絵から友だちも含まれた絵へと時間の経過とともに変化したことから順調に友人関係を構築していることを、参与観察の結果と合わせて確認し、お絵かきが外国にルーツを持つ子どもに対する調査手法として有効であるとしている。

一方、外国にルーツを持つ子どもに対して写真を用いて参加型調査をした事例はないが、日本人の子どもの危険や不安認知の構造の把握を目的とする調査(岡本・林・藤原, 2008)の中で写真が活用されており、子どもに対するこの手法の有効性が確認されている。ここでは、筆者らが日本で生活する外国にルーツを持つ子どもたちを対象に試験的に実施した写真を用いた参加型調査の事例をもとに、こうした子どもたちに対する調査におけるこの手法の有効性を議論する。

1) 調査の概要

本調査は、NPO団体が運営する外国にルーツを持つ子どものための日本語、学校の教科、そして母語の学習支援の教室の夏休みのプロジェクトとして、2011年8月に実施したものである。外国にルーツを持つ子どもたちの視点からみた日本社会での生活を明らかにするとともに、この団体が所在する地域で毎年10月に開催されるお祭りで写真展を開催して地域の人たちにこうした子どもた

ちの存在や想いを理解してもらうこと、さらにそのプロセスを通して子どもたちにエンパワメントの機会を提供することを目的に、この団体の教室に通っている幼稚園から中学生までの27名に参加してもらって実施した。

調査方法としては、写真を用いた参加型調査であるフォトボイス(Blackman, 2007; Wang, 1999; Wang & Burris, 1994 & 1997)が使用された。このフォトボイスでは、研究対象者自身にカメラを渡し、自分の写真(フォト)に撮影者自身が語り(ボイス=説明文)を加えた作品を作成していくことで、以下のような目的を達成することが可能であるとされている。

- 1) 参加者に、コミュニティの強さと課題を記録し、考察してもらう機会を提供
- 2) 写真に関するグループでのディスカッションを通して、個人的そしてコミュニティの課題に関する批判的な対話や知識の創造
- 3) 写真作品を活用しての政策立案者に対するロビー活動
- 4) 自己成長を促す臨床的な効果
- 5) 職業訓練として生計手段の提供

このフォトボイスの手法に基づき、本調査では8月中に3回のワークショップを子どもたちに対して開催した。その中では、写真の魅力の説明に始まり、基本的な使い捨てカメラの操作、そして実際に撮り方の練習、試し撮りなどを行ったのち、本番用の使い捨てカメラを渡して、ふだん遊んでいる場所、家族、食べ物、大事にしているもの、風景などそれぞれが気に入ったものを撮影してもらい、お祭りの写真展用に1~4枚の写真を選択してもらって組み写真の作品を完成させた。

2) フォトボイス作品から見てきたこと

子どもたちが制作した写真作品を見てみると、一番多かったのが家族をテーマにした作品であった。組み写真のタイトルにも、「僕の家族」、「私の家族」、「家族の絆」、「楽しい家族」といったものが並び、やはり子どもたちにとって家族が大きな位置をしていることがわかる。小学3年生であるインド系シンガポール人の男子の「自分の家

族」という写真には、自宅の壁に飾られた家族の集合写真が写されており、「大の仲良し家族です。」という語りが付されている。家族につづいて多かったのが、友人に関するものである。たとえば、アルゼンチン人の小学3年生の女子の「3人」と題された写真には、「友だちと3人で一緒に、“はい、ポーズ”。思い出です。」とあるし、フィリピン人の中学1年生の女子の「ともだちからのおてがみ」という作品には「授業中に書いている手紙。小学校からの友だちからのもらったもの。これからも仲良くしたいな。」と記されている。また、夏休みの思い出や子どもたちが大事にしているものや好きなものを写した作品も多かった。夏休みの思い出としては、バーベキュー、花火、虫取り、遊園地、川遊びなどの場面が多く、大切なものとしてはiPad、好きなサッカー選手の本、誕生日プレゼントにももらったハローキティの時計、ペット（ハムスター、金魚、クワガタなど）、サッカーボールなどが写されていた。

これらの作品は、必ずしも外国にルーツを持つことを感じさせない作品であり、日本社会の中で生活する外国にルーツを持つ子どもたちが、日本社会の中で年齢に応じた生活を送っていることが確認できた。こうした「ルーツ」を感じさせない作品が大半を占める一方、数としては少ないが、子どもたちの「ルーツ」や彼（女）らが日本社会で置かれている現状を示す作品も確認できた。

たとえば、南米系のダブルの小学1年生の男子がポルトガル語の教科書を写した「勉強中で～す」というタイトルの作品には、「ポルトガル語、ガンバリます。大きくなったら、セレソン（各国のスポーツの代表チームの意）になるから！」という語りが付されており、将来母国を代表して活躍することを夢見て、日本においても母語を一生懸命習得しようとするこの子どもの想いが伝わってくる。また、アルゼンチン人の小学3年生の女子の「ASADO（アルゼンチン料理の一種である牛肉の炭火焼きの意）」という作品には、「アルゼンチン風バーベキュー la same de les（牛肉）、chorizo（ピリ辛ソーセージ）。豪華でしょ？とってもおいしかった～！」という語りがついており、彼女が日本社会の中でも自分たちの文化を楽しんでいることがわかる。さらに、「離れていて会え

なかつたりするけど、me familia（私の家族の意）は最高、だいすきです!!友だちもね！」という語りがついている南米系ダブルの小学4年生の女子の「楽しい家族」と題された組み写真や、「家から見た空は、スペインの空といっしょ！とてもきれいな空はつながっているのかな？」という語りのついたヨーロッパと南米のダブルの幼稚園年長の女の子の「そら」と題された作品から、こうした子どもたちが、母国から遠く離れた日本で生活しながらも母国のことや母国の家族に想いを馳せていることが伝わってくる。

3) フォトボイスを通しての参加者の変化

フォトボイスのような参加型調査の目的の一つは、その調査プロセスを通して参加者のエンパワメントを達成することである（Kemmis & MaTaggart, 2005；Kemmis & Wilkinson, 1998）。今回のフォトボイスでも、外国にルーツを持つ子どもたちに、自分たちの想いを写真を使って自由に表現できる機会、そして写真展を通してその作品を多くの人に見てもらう機会を設けることによって、エンパワメントを目指した。

実際、プロジェクト終了後に、教室でそれぞれの子どもたちを担当する各先生に行ってもらった子どもたちに対するインタビュー結果では、「写真の撮り方を学べてよかった」や「写真に関心を持つようになった」という意見が多く、参加者がフォトボイスの経験を非常に前向きにとらえていることが確認できた。たとえば、インド系シンガポール人の小学3年生の男子は「楽しかった。写真を撮るのが楽しかったのでまたやりたい。自分の好きなものをかっこ良く撮ることができて大満足」と言っているし、南米系ダブルの小学3年生の男子は「写真展に参加すると聞いて恥ずかしかったけど、実際に出来上がった自分の作品をみてうれしかった」と感想を語っている。さらに、ブラジル人の小学4年生の男子は「自分の写真のまわりに見に来てくれた人が感想のコメントカードをいっぱい貼ってくれていたの、（それを見た）お母さんが喜んでくれたのでうれしかった」と、写真展で自分の作品に多くの人が肯定的なコメントをしてくれたこと、さらにそのことを母親が喜んでくれたために、非常にうれしく自信

になった様子が伝わってくる。

こうしたフォトボイスを通じた肯定的な経験は、その後の教室での態度についても肯定的な変化（エンパワメント）を起こしていることが、教室で子どもたちを担当している以下の各先生方からのコメントからも確認できる。たとえば、フィリピン人の小学3年生の女子を担当している先生は「Aは恥ずかしがり屋で反対のことを言ってみたり、素直な気持ちを言わなかったりしていたけど、フォトボイスをしたあとの最近は前よりも素直に思うことをいうようになった気がします」と、その変化を感じ取っている。この女子自身も、「（フォトボイスは）楽しくて、もっとやりたい。写真の面白さがわかった。写真展にたくさんの人が見に来てくれてうれしかった」と感想を述べており、こうした肯定的な経験が自信になっていることがわかる。また、「ワークショップに参加して『意外と』楽しかった。写真展に多くの人が見に来てくれてうれしかったし、やってよかった。写真が好きになった」と感想を述べていた男子を担当する先生は、「フォトボイスに参加することにより、本人の思考が前向きになってきた感じがする」と、この男子の変化を感じ取っている。さらに、「自分の大切なものを、（写真展をとおして作品をみてもらい）お母さんにわかってもらえてうれしかった」と感想を言っていた南米系ダブルの小学1年生の男子を担当する先生も、「教室にきていても勉強をしたり、椅子にすわる時間も短くて集中できなかったが、自らが考えて写真をとったり作品を作っていく事のおもしろさを体験したことで、何でも興味を示せるようになりつつあります」と、この男子の小さな変化を察知している。

このように、外国にルーツを持つ子どもたちにとって、写真という視覚的手法を用いた参加型調査が子どもたちが積極的に参加できるものであり、自分たちの想いを自由に表現してもらう手法として有効だということが確認できたとともに、そのプロセスが参加者の子どもたちのエンパワメントを引き起こす可能性を秘めていることがわかった。

VI. おわりに

本稿では、外国にルーツを持つ子どもたちを対象にした調査における注意点を整理するとともに、フォトボイスの調査事例を紹介しながら、こうした子どもたちに対しては視覚的手法を用いた参加型調査が有効であることを議論してきた。

フォトボイスを開発したWangら（Wang & Burris, 1997）は、写真を調査に用いることのメリットを以下のようにあげている。

- 普段、影響力を持たない人たちの視点からの世界観を知ることができる
- 社会の中のもっとも脆弱な人たちや、読み書きできない人たちでも、使い捨てカメラの使い方さえ習得できれば参加可能
- 参加者各自が好きな場所で自由に写せるので、さまざまな社会的状況や行動的状況の情報収集が可能
- カメラや写真は多くの人にとって魅力的なものであるため、多くの人の「参加」を促すことが可能
- 写真をとることによって、被写体の人からコミュニティの情報を撮影者が学ぶことが可能
- 写真を被写体や知人に渡すことによって感謝され、人間関係を深める効果
- コミュニティの課題だけでなく、資源も明らかにすることが可能
- 写真を用いた議論のなかで、課題の優先順位づけや解決法の話合いが促進され、ソーシャルアクションを喚起

こうしたフォトボイスのメリットに照らし合わせて考えてみても、日本社会のなかで言語や文化、あるいは年齢といったさまざまな壁に直面しながら暮らし、なかなか自分たちの声を表現する機会を与えられていない外国にルーツを子どもたちを対象にした調査では、こうした手法が効果的だということがわかる。

海外で外国にルーツを持つ子どもたちを対象に視覚的な参加型調査を実施したWhiteら（2010）も、子どもは単純に写真やお絵かきといった視覚的手法に関心を持つし、読み書きや口頭での表現

が不要な活動を通して自分を表現することが可能となり、伝統的な1対1のインタビューが抱える問題を克服することができるとしている。さらに、お絵かきや写真は、調査のプロセスの主導を子どもたちに渡すことができるので、子どもたちのペースでコミュニケーションをとることが可能となるとともに、調査者との間の信頼関係構築にも役立つ。

しかし、こうした視覚的な参加型調査を子どもたちに適用する限界もある。たとえば、子どもたちは集中力の持続時間が短いため、計画通りに調査を進行しづらいことや、子どもたちに調査の主導を委ねるということと限られた期間に調査を終了しなければいけないという時間的な制約の板挟みになることなどがあげられる。特に今回のフォトボイスの調査では、夏休みのプロジェクトとして実施して10月の写真展までに作品を仕上げなければいけないことと、子どもたちが学校からの夏休み課題を教室でこなさなければいけないという時間的な制約があった。こうした状況から、子どもたちとすでに信頼関係が構築できている教室の先生方にフォトボイスのファシリテーターの補助として手伝っていただいたり、各子どもたちへのインタビュアーになっていただいたりするなどの配慮を行った。さらに、子どもたちの調査参加への動機づけのために、子どもとかかわることに慣れている外部ファシリテーターにアイスブレイクや、ワークとワークの間に簡単なゲームを実施してもらい、子どもたちの集中力が維持するよう試み、一定の効果を上げることができた。

それでも、特に年少の子どもたちにとっては大人数で長時間共同で作業することは大変であった。海外の調査事例 (Mand, 2012; White et al., 2010) でも、子どもを対象にした参加型調査における時間的な制約や、調査の進行の難しさが指摘されている。Whiteら (2010) は、自分たちが実施した調査をふりかえり、調査プロセスの秩序がきちんと守られていたわけではなく、どちらかという混乱状態であったことを認めている。そして、限られた時間内に、限られたスペースで多くの子どもたちと作業することは時には非常に困難であったとしている。われわれのフォトボイスを用いた調査でも、それぞれが制作した作品をもと

にしたグループディスカッション(インタビュー)を当初予定していたが、人数が多くて実施が不可能だと判断して、担当の先生による個別インタビューに切り替えることを余儀なくされた。こうしたことを考えると、参加する子どもの特性に合わせた時間的に余裕のある調査計画を立てるとともに、参加人数に関しても十分に配慮することが、視覚的な参加型調査を子ども、特に外国にルーツを持つ子どもたちに実施する際の成功の鍵となると考えられる。

付記：本稿は、科学研究費補助金(課題番号：23530790)の助成を受けて行った調査の成果の一部を元に作成されたものである。

【参考文献】

- (財団法人)アジア・太平洋人権情報センター編(2011)『外国にルーツをもつ子どもたち:思い・制度・展望』現代人文社。
- 網野武博(2001)「外国人保育の課題と展望:わが国における行政の対応状況と保育所での受け入れ」『月間福祉』84(5), 88-91.
- Blackman, A. (2007). *The PhotoVoice Manual: A Guide to Designing and Running Participatory Photography Projects*. PhotoVoice.
- Clark-Ibáñez, M. (2004) Framing the social world with Photo-Elicitation Interviews. *The American Behavioral Scientist*, 47(12), 1507-1527.
- Fine, G. A., & Sandstrom (1988) *Knowing Children: Participant Observation with Minors*. London: Sage.
- 福山文子(2010)「ペアレントクラシーへの転換がもたらすもの:外国人児童・生徒の現状を手掛かりにして」、『人間文化創成科学論業』13, 269-277.
- 花崎みさを(2003)「在日外国人女性への生活救護の現状と課題」『社会福祉研究』88, 88-94.
- Hart, R. A. (1997) *Children's Participation: The Theory and Practice of Involving Citizens in Community Development and Environment Care*. London: Earthscan. (IPA日本支部訳『子どもの参画』萌文社、2000年).
- 林田幸子・片岡弥恵子(2008)「DVにより夫から離れることを決断した在日外国人妊婦の事例」『聖路加看護学会誌』12(2), 33-40.

- Hill, M. (1977) Participatory research with children. *Child & Family Social Work*, 2 (3), 171-183.
- 菱川愛 (2011) 「子どもの調査面接の組み立て方」、『子どもの虐待とネグレクト』13 (3), 331-336.
- 法務省 (2011) 「平成23年版『出入国管理』」『法務省ホームページ』 (<http://www.moj.go.jp/content/000081958.pdf>, 2012年12月14日確認).
- 法務省 (2012) 「国籍 (出身地) 別年齢・男女別外国人登録者」『法務省ホームページ』 (<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001089591>, 2012年12月14日確認).
- 本間知己 (1996) 「外国人児童の学校適応と受け入れを規定する要因」『カウンセリング研究』29 (1), 27-36.
- 移住者と連帯する全国ネットワーク編 (2012) 「特集 外国にルーツをもつ子どもたち」『Mネット』155, 3-19.
- 今村祐子・高橋道子 (2004) 「外国人母親の精神的健康に育児ストレスとソーシャルサポートが与える影響：日本人母親との比較」『東京学芸大学紀要1部門』55, 53-64.
- 井野佳一 (1996) 「外国人未払い医療費対策事業」『都市問題』87 (2), 15-25.
- 岩木エリーザ・井上孝代 (2010) 「在日ブラジル人コミュニティにおける子どもたちの発達課題と心理支援」『こころと文化』9 (1), 29-35.
- James, A., Jenks, C., & Prout, A. *Theorizing Childhood*. Cambridge: Polity Press.
- 鄭明愛 (2009) 「国連自由権規約委員会勧告 在日無年金問題」『ひょうご部落解放』132, 51-54.
- カラカサン (2006) 『移住女性が切り拓くエンパワメントの道：DVを受けたフィリピン女性が語る』解放出版社.
- 鍛冶致 (2012) 「2005年国勢調査に見る『外国にルーツを持つ子どもたち』：その人口規模と家庭環境」『Mネット』155, 3-19.
- Kemmis, S. & McTaggart, R. (2005) Participatory action research. In N. Denzin & Y. Lincoln (Eds.), *The Sage Handbook of Qualitative Research* (pp. 559-603). Sage.
- Kemmis, S. & Wilkinson, M. (1998) Participatory action research and the study of practice. In B. Atweh, S. Kemmis, & P. Weeks (Eds.), *Action Research in Practice: Partnerships for Social Justice in Education* (pp. 21-36). New York: Routledge.
- 金永子 (2007) 「在日外国人に関連する生活保護制度のいくつかの問題について—在日朝鮮人を中心にして」『部落解放』575, 26-31.
- 金泰泳 (1996) 「在日韓国・調査人における地域境と民族的アイデンティティ：点在地域の子どものアイデンティティ状況を中心として」『大阪大学教育学年報』1, 187-199.
- 小西一博・稲垣応顕 (2012) 「転校を伴う外国人 (ブラジル人) 児童の学校適応に関する事例研究 (2)：友達関係の広がりについて」『上越教育大学研究紀要』31, 19-28.
- 小菅寿美子 (1996) 「外国人住民のすまい：住環境の現状と課題」『都市問題』87 (2), 63-77.
- 真鍋眞澄 (2001) 「ニューカマーの子どもたちの名前をめぐる同化・異化、受容について：日本の小学校におけるフィリピンの一児童に関する事例研究」『上智大学教育学論集』35, 19-33.
- 真鍋眞澄 (2007) 「ニューカマーの子どもたちについての『居がい』について：移り住んだ場所への文化的アイデンティフィケーションに関する一考察」『子ども社会研究』13, 32-48.
- Mand, K. (2012) Giving children a 'voice': Arts-based participatory activities and representation. *International Journal of Social Research Methodology*, 15 (2), 149-160.
- Mauthner, M. (1997) Methodological aspects of collecting data from children: Lessons from three research projects. *Children & Society*, 11, 16-28.
- 文部科学省 (2012) 「日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査 (平成22年度)」の結果について」文部科学省ホームページ (http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/08/_icsFiles/afidfieldfile/2011/12/12/1309275_1.pdf, 2012年12月14日確認).
- 永井哲 (2005) 「季節風『在日』を閉め出す論理：無年金在日外国人障害者・高齢者はいつまで放置されるのか?!」『福祉労働』106, 122-124.
- 中島眞一郎 (2011) 「相談事例から外国にルーツを持つ子どもの人権を考える」(財団法人) アジア・太平洋人権情報センター編『外国にルーツをもつ子どもたち：思い・制度・展望』(pp. 85-94), 現代人

- 文社.
- 大場幸夫・民秋言・中田カヨ子・久富陽子 (1988) 『外国人の子どもの保育：親たちの要望と保育者の対応の実態』 萌文書林.
- 岡本卓也・林幸史・藤原武弘 (2008) 「写真投映法による危険認知の把握 (4)：子どもの危険・不安認知の構造」 『日本社会心理学会第49回大会』 244-245.
- 大窪高志 (2001) 「外国人と生活保護制度」 『社会科学研究科紀要』 7, 97-113.
- 小野寺理佳 (2001) 「外国人の子どもの学校生活と親の意識」 小内透・酒井恵真編著 『日系ブラジル人の定住化と地域社会：群馬県太田・大泉地区を事例として』 (pp. 207-219), お茶の水書房.
- 小内透 (2001) 「日本人の親子から見た外国人との交流」 小内透・酒井恵真編著 『日系ブラジル人の定住化と地域社会：群馬県太田・大泉地区を事例として』 (pp. 198-207), お茶の水書房.
- 朴星麗 (2002) 「在日韓国朝鮮人に対する社会保障制度：無年金問題について」 『多民族共生』 13, 2-4.
- PLA Notes (1996) 'Special Issue: Children's Participation', *PLA Notes*, 25, London: International Institute of Environment and Development.
- Punch, S. (2002) Research with children: The same or different from research with adults?. *Childhood*, 9 (3), 321-341.
- 坂井禮子 (1995) 「保育：心と心の掛け橋は言葉」 『月間福祉』 78 (1), 20-23.
- 清水冬樹 (2011) 「子どもにやさしいまちづくりのための子ども調査の有効性に関する一考察：旭川市後期次世代育成支援計画を参考に」 『旭川大学女子短期大学部紀要』 41, 109-120.
- Streng, J. M., Rhods, S. D., Ayala, G. X., Eng, E., Arceo, R., & Philipps, S. (2004) Realidad Latina: Latino adolescents, their school, and a university use photovoice to examine and address the influence of immigration, *Journal Interprofessional Care*, 18 (4), 403-415.
- 田嶋淳子 (1995) 「外国人居住者と日本の地域社会：その現状と課題」 日本地方自治学会編 『現代の分権化：戦後地方自治の展開の中で』 (pp. 199-215), 敬文堂.
- 田村太郎 (2000) 『多民族共生社会ニッポンとボランティア活動』 明石書店.
- 都築くるみ (2001) 「外国人との『共生』とNPO：愛知県豊田市H団地を取り巻くNPOの現状と課題」 『コミュニティ政策研究』 3, 61-79.
- 上野直子 (2003) 「在日外国人幼児へのコミュニケーション支援：家族への援助の視点から」 『コミュニケーション障害学』 20, 34-39.
- Wang, C. (1999) Photovoice: A participatory action research strategies applied to women's health. *Journal of Women's Health*, 8 (2), 185-192.
- Wang, C. & Burris, M. A. (1994) Empowerment through Photo Novella: Portraits of participation. *Health Education Quarterly*, 21 (2), 171-186.
- Wang, C., & Burris, M. (1997) Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. *Health Education & Behavior*, 24, 369-387.
- Warwick, I., Neville, R., & Smith, K. (2006) My life in Huddersfield: Supporting young asylum seekers and refugees to record their experiences of living in Huddersfield, *Social Work Education: the International Journal*, 25 (2), 129-137.
- 渡戸一郎 (2002) 「新渡外国人」 上田正昭編 『ハンドブック国際化の中の人権問題第3版』 (pp. 129-142), 明石書店.
- White, A., Bushin, N., Carpena-Mendez, F., & Ni Laoire, C. (2010) Using visual methodologies to explore contemporary Irish childhoods. *Qualitative Research*, 10 (2), 143-158.
- 山内昌和 (2010) 「近年の日本における外国人女性の出生数と出生率」 『人口問題研究』 66 (4), 41-59.

Using participatory research for a studies on immigrant children: A case study using photovoice

Joe Takeda ^{*1} Hiroki Hara ^{*2}

ABSTRACT

As the number of immigrant children in Japan has increased, the number of studies on this population that have been conducted over the last 20 years has also increased. However, only a limited number of studies have focused on and discussed what research methods are suitable for this population in Japan. The purpose of this study is to discuss the effectiveness of participatory research using visual techniques with immigrant children. After briefly discussing the social issues that these children face within Japanese society, this paper discusses the difficulties and risks of using conventional research methods with children, and then explores possible alternative research methods suitable for children. Research with immigrant children using Photovoice, a method of participatory research that makes use of photography, is introduced to discuss the effectiveness and limits of using this technique in studies on immigrant children.

Key words: children, participatory research, immigrants

* 1 Professor, School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University

* 2 2nd Year Master's Student, Graduate School of Human Welfare Studies, Kwansei Gakuin University